

## 名古屋大学留学生相談室（740号室）活動報告

高木ひとみ

### はじめに

2009年度は、これまでの個別相談や教育活動に加えて、国際交流に関心のある学生たちが参加できる研修プログラム（グローバル・リーダー育成プログラム）を強化し、学生の多文化理解能力、国際交流プログラム企画能力、ファシリテーション能力を高める参加型の研修を開催した。さらに新しい取り組みとして、国際交流学生グループのネットワークを築き、共同で学生たちの取り組みを紹介する活動報告書を発行した。

本報告では、2009年度の活動を、「相談活動」、「国際教育プログラム」、「セミナー・地域連携」の3つに分けて報告する。

### I. 相談活動

2009年度は、6～7コマの相談時間を設け、日本語と英語による個別相談（アドバイジング・カウンセリング）

を行った。表からわかるとおり、国際交流、学業・研究、心身不調・精神不安に関わる相談が多くあった。

#### 【指導教員・研究室】

学生が指導教員や研究室内の他学生とより良い関係を築きたいと希望を持ちながらも、言語の使い方、文化や価値観の差異などから、留学生自身がイメージしたように、伝えられていないケースや、理解を得られず文化的な摩擦を経験しているケースが多く見られた。相談の中で、留学生が体験している葛藤と向き合い、留学生の文化的な背景を尊重しながらも、日本文化におけるコミュニケーションスタイルや大学文化の深い部分まで学ぶことのできる機会を提供した。

#### 【学業・研究・日本語】

特に研究生、大学院生の学生たちの相談が多い傾向が見られた。修士論文や博士論文の完成に向け、多くのエネルギーの消費し、不安感を抱いているケースが多かつ

相談件数記録（2009年4月～2010年3月）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
指導教員・研究室	7	4	7	5	7	3	8	6	8	2	1	1	59
学業・研究・日本語	11	4	6	7	8	3	9	8	11	5	4	3	79
入国・在留関係								5	5	1	1	1	13
宿舍												1	1
奨学金・授業料			3										3
医療・健康					3	3			5	4	2	3	20
生活・適応	4	3	4	3	5		7	6	6	4		1	43
進路・就職・インターンシップ	6	4	13	5	4		5	8	8	2		1	56
帰国										1	1	1	2
家庭・家族			3	3	3		4	4	4	2	2		25
地域			2						2		2		6
人間関係	4	3	3	3	3	3	5		3	2	2	1	32
心身不調・精神不安	6	2	15	19	5	3	4	2	7	2	3	5	73
国際交流	30	10	8	8	9	10	27	9	7	10	8	5	141
その他												1	1
合計	68	30	64	53	47	25	69	48	66	35	26	24	554

た。また論文を進めるにあたって、指導教員との関係構築についても、悩む留学生が多く、相談にあたった。

### 【就職・進路・インターンシップ】

日本において就職を希望する留学生が増えているためか、就職活動に関する一般的な相談からキャリア形成、また進路を決定する上で、人生観などを相談するケースが多く見られた。就職に関しては、主に留学生相談室が行っている就職支援ガイダンスに関する情報提供型の相談が多く、進路に関する相談では、キャリアカウンセリングなどの手法を用いるケースが多かった。

### 【心身不調・精神不安】

異文化不適應の初期症状、停滞症状、精神疾患が生じたケースなどが見られた。留学生相談室にて継続的なカウンセリングを提供するとともに、必要に応じて、指導教員、留学生担当教員、事務職員、保健管理室との連携により、包括的に学生を支援することにつとめた。また数件、危機管理的な介入を必要とするケースも見られ、関係教職員とのチームとしての関わりや対応の重要性を再確認する機会となった。

### 【国際交流】

全学の新生を対象としたガイダンスで「名古屋大

学留学生センター&留学生相談室 国際交流活動の紹介」リーフレットを配布するようになってから、特に一般学生からの国際交流やプログラムに関する相談の件数が増えている。内容としては、学内の国際交流活動への参加方法、留学生と一般学生の友人づくりについて、異文化体験や海外経験を積む機会、外国語を使用する機会などである。国際交流や異文化体験に関心のある学生たちから、学内において開催されているプログラムの案内を一括して、ひとつの情報源（例えばメーリングリストやホームページ）などから得る方法はないかと良く質問がある。今後、留学生センターなどと連携して、学生への情報伝達の方法などについて検討していく必要がある。

## II. 国際教育プログラム

国際教育プログラムとして、本年度は、多文化間ディスカッショングループ、多文化シネマの会・多文化フードの会（学生支援GP事業）、スモールワールド・コーヒーアワー、グローバル・リーダー育成プログラム、Nagoya University Global Network 活動、博士論文サポートグループ、オリエンテーション活動、授業などを実施した。

### 2009年度多文化間ディスカッショングループ

2009年度前期	
日本語グループ	2009年5月29日～7月17日 毎週金曜日5限 参加人数：9名（留学生5名、一般学生4名） ファシリテーター：3名（留学生相談室スタッフ1名、学生2名） 主なテーマ：キーワードによる自己紹介、パートナー紹介、コーヒーアワーに参加してみよう、ことば、結婚・家族について、将来の夢、グループを振り返って 言語：主に日本語でディスカッションし、状況によって留学生の母語も使用した。
英語グループ	2009年6月1日～7月13日 毎週月曜日5限 参加人数：6名（留学生3名、一般学生3名） ファシリテーター：2名（学生2名） 主なテーマ：カラーイメージネーション（自己紹介）、学生生活、世界の食卓・伝統行事、お気に入りの言葉・フレーズ、振り返り 言語：主に英語でディスカッションし、状況によって、日本語を使用した。
2009年度後期	
日本語グループ	2009年11月9日～2010年1月25日 毎週月曜日5限 参加人数：10名（留学生5名、一般学生5名） ファシリテーター2名（学生1名、ボランティアスタッフ1名） 主なテーマ：自分を色であわらしてみよう、パートナー紹介、私のおすすめ、LOVE、将来の夢、習慣、私の専門自慢、ディスカッショングループを振り返って 使用言語：主に日本語でディスカッションし、状況によって留学生の母語も使用した。

## 1. 多文化間ディスカッショングループ

2009年度の多文化間ディスカッショングループは、前期に2グループ、後期に1グループ、計3つのグループを開催し、参加者は計25名（留学生13名、一般学生12名）であった。

### 【参加者の様子】

- ・ディスカッショングループに参加する学生たちのニーズとしては、日本語グループでは、一般学生は、「留学生と交流したい」、「留学生と友人になりたい」、留学生は「日本語が話せるようになりたい」、「日本人の友達をつくりたい」などが多い様子であった。英語グループでは、一般学生だけではなく、英語を母国語としない留学生にとっても、「英語力を高めたい」、「国際交流したい」、「視野を広げたい」というニーズがうかがえた。
- ・継続して参加する学生や既参加者の勧めで参加する学生なども多い様子であった。また既参加学生が、自らの希望で学生ファシリテーターとして運営側にまわるケースも見られた。
- ・専攻分野の異なる参加者が、ひとつのテーマについて、多面的な視点や考え方を共有できる機会は、学生生活において貴重な経験であり、対話を通して、自分自身を振り返る機会になっていたようである。
- ・授業やゼミなどでは、批判的な物事の見方や分析力を高めるための教育を受けているが、ディスカッショングループでは、互いに経験や気持ちを肯定的に受けとめあう場となっているため、学業の場を離れて、新鮮な刺激を得られる場、さらに和む時間として、参加学生の心を癒していたようである。
- ・グループ活動以外にも、食事会やパーティーやカラオケなどに行く機会があり、親睦が深まったと思われる。
- ・言語の面については、様々な工夫が必要であった。特に英語を用いてディスカッションする場合、訳しあうことが必要となったが、学生が主体的に言語面においてサポートしあいやすくなるよう、ファシリテーターたちが、工夫して取り組んでいた。訳が必要となさぬ場合を作ったり、日本語や英語を交ぜながら話してみたり、話しやすいテーマを選んだりみたり、言葉の違いを越えていくことにチャレンジしている様子が見られた。

## 【今年度の多文化間ディスカッショングループ活動を振り返って】

「多文化間ディスカッショングループ」は、対話を通しての多文化交流の場であり、学生が授業や研究の合間にリラックスしながら、文化的な学習も経験することのできる居場所のひとつとして機能している。さらに、留学生にとっては母国語ではない日本語を用いて、一般学生にとっては慣れない英語などを用いて、自分の経験や考えを共有し、受容されるという体験は、参加者にとって自尊心を高める機会となっている様子が見られた。

この活動を展開し、約4年経ち、現在では、既参加学生がファシリテーターを担当する割合が増えており、学生が学生を支える場として機能し始めている。今後も参加者にとって、ゆるやかな相互交流が促進される場として、さらに運営側に関わる学生がファシリテーションという経験を通して、コミュニケーション能力を高められる場として、グループを展開していきたい。

## 2. 多文化シネマの会・多文化フードの会

昨年度から学生支援 GP 推進室と実施している多文化の会シリーズを本年度も実施した。参加者は前期・後期合わせて、31名（留学生20名、一般学生11名）であった。

前期は、「多文化シネマの会」を開催し、映画を鑑賞した後に、英語と日本語を用いて、振り返りディスカッションを行った。言葉の壁を感じながらも、辞書を用いたり、互いに訳しあったり、コミュニケーションを取ることにチャレンジしていく学生たちの姿が見られた。また毎回のセッション終了後、参加学生たちが主体的に夕食を食べに行く様子が見られ、セッション中に語り尽くせなかったことを共有し、親睦を深める機会となったようである。

後期には、「多文化フードの会」を開催し、学生たちによる「食文化」のミニ・プレゼンテーションと2回の調理実習を行った。「食」を通して、文化的な違いや共通点を発見している場面が多く見られた。さらにチームで調理するという共同作業を通して、参加学生に一体感や達成感をもたらしていた。

多文化の会シリーズの詳細については「名古屋大学学生相談総合センター紀要第9号、2009」を参照されたい。

### 3. スモールワールド・コーヒーアワー

今年度のスモールワールド・コーヒーアワー（以下、コーヒーアワー）も学生スタッフたちの力によって、6回のコーヒーアワーを開催することができ、約410名の参加者があった。本年度の新しい取り組みとしては、学生がコーヒーアワーの活動をより主体的に行えるよう、名大祭にてフリーマーケットを開催し、学生自身が自由に活用できる活動資金を得ることができたことである。活動資金が増えたことにより、幅の広い国際交流イベントを開催できることに繋がった。

#### 【コーヒーアワー参加者の様子】

- ・毎回のコーヒーアワーを楽しみにしている学生が多く、学生同士のネットワークを広げる場となっている。
- ・コーヒーアワーには初めて参加する学生も多いがゲームなどが準備されているため、他の参加者と話しやすいようである。継続して参加する学生にとっては友人との再会を楽しんだり、新しい参加者との出会いを楽しんでいる様子である。
- ・一般学生が、留学生センターに入りセンターを利用することには、抵抗感があるようであり、留学生センターのラウンジにて、コーヒーアワーが開催されていることにより、センターに入る機会ができ、よ

り近い教育施設として感じられるようになるという声を多く聞く。留学生センターで行われている他の教育活動の情報も得られることにつながっているようである。

- ・コーヒーアワーは、留学生と一般学生の交流の場としての機能だけでなく、留学を希望する学生が、海外留学を経験した学生や交換留学の協定先の短期交換留学生などに出会える場ともなっており、自然な形で留学に関する情報交換をしている様子である。

#### 【学生スタッフの活動と成果】

##### 組織・運営

- ・コーヒーアワーの運営に関わる学生たちは、コーヒーアワー開催のために、ほぼ毎週1回、昼休みに集まり、企画や準備を進めている。1回のコーヒーアワーの会を催すために、3～4回の打ち合わせを重ねて、本番を迎えている。
- ・毎回のテーマを発案することは容易ではないが、学生たちは、参加者のニーズを大切にしながら、また学生がどのようなイベントだと参加しやすいかを検討し企画を練っている。
- ・今年度の目標は、「継続的に参加したいと思う参加者を増やすこと」であった。会場の中で人が交流しやすい動きをどのようにデザインするか、また初めて

#### 2009年度スモールワールド・コーヒーアワー

日時	テーマ	参加人数
4月24日	コーヒーアワー：「自己紹介ゲーム」	約80名
5月29日	コーヒーアワー：「世界のジェスチャー」	約70名
6月6日～7日	名大祭：フリーマーケット	
6月26日	コーヒーアワー：「ジャパンアワー・緑日」	約70名
10月30日	コーヒーアワー：「自己紹介 BINGO」	約70名
11月27日	コーヒーアワー：「抹茶と紅葉で秋を味わおう」	約50名
12月18日	コーヒーアワー：「チーム対抗 名古屋 BINGO」	約70名
	計	約410名

#### スモールワールド・コーヒーアワー 運営・組織作りのための活動記録

毎月3～4回	学生スタッフミーティング
4月	新スタッフ歓迎会
7月16日、8月3日	国際交流グループ 学生スタッフ募集説明会
夏休み	スタッフ懇親会
11月4日	新スタッフ歓迎会
1月7日	学生スタッフ新年会
1月20日、2月3日	国際交流グループ 学生スタッフ募集説明会
3月	学生スタッフ「卒業生を送る会」

参加した学生が他の参加者とつながりやすくするには、どのようなサポートがあると良いかなどを検討しながらイベント企画に取り組んでいた。

- ・広報活動も積極的に行っていた。学生スタッフ自身が、食堂などをまわり、ポスターを掲示し、コーヒーアワー当日の昼休みには、参加者が増えるよう、会場近くで宣伝をしていた。
- ・コーヒーアワーのイベントにおいては、設営、受付、司会・進行（日本語、英語）、ゲーム、参加学生のサポート、茶菓子などのセッティング、後片付け等、役割分担を決め実施している。学生のイベント企画・運営・ファシリテーション能力を高める機会となっている。
- ・学生スタッフチームとして組織的に発展するよう、メーリングリストの活用、MINTの活用（学内ソーシャル・ネットワーク・サービス）、新スタッフ歓迎会、懇親会、卒業生を送る会等、学生スタッフ間のコミュニケーションの場を大切にしている。
- ・今年度は、活動資金を増やすために名大祭にてフリーマーケットを実施、また活動報告書の作成などに取り組んだ。

#### 【学生スタッフチームにおける相互支援・交流】

学生スタッフチームには、国際交流に関心のある学生、海外に行ってみみたい学生、学内の留学生と一般学生の交流を促進したい学生、留学から帰国しキャンパスの国際化に貢献したい学生などがメンバーとなっている。活動を通して、メンバー間の親睦が深まり、コー

ヒーアワーのイベントを作り上げるだけでなく、学生生活に関わる様々な情報交換（授業履修、留学、就職、進学）をしたり、互いに励まし合ったり、互いに支え合う場面が多くみられる。共通の目標（国際交流に関わることやコーヒーアワーを作っていくこと）を通じて、その目標を達成するだけではなく、学生メンバー間のサポートグループとしての機能も果たしていると考えられる。

#### 【今年度のコーヒーアワー活動を振り返って】

コーヒーアワーが展開している「国際交流活動」というと、その活動の表面的な部分から見えるイメージで、「遊び」のイベントだと捉えられる可能性があるが、コーヒーアワーの参加者や学生スタッフの様子を見てみると、この「国際交流」という活動は深い部分において、教育的な活動だということが理解できる。コーヒーアワーは学内において「国際交流」への一歩を踏み出せる場として、人とつながれる場として、人が喜ぶことを提供できる場として、そして学生が学生を支援する場として、多様な機能を果たしている。これからも、多くの可能性を秘めている「コーヒーアワー」の活動を通して、参加学生や運営する学生たちの成長を支えていきたいと思う。

#### 4. グローバル・リーダー育成プログラム

本年度は留学生特別経費により、留学生センターとともに開発してきた「国際交流コーディネーター養成セミナー」、「グローバル人材育成ワークショップ」を

#### 第1回 グローバル・リーダー育成プログラム

「国際交流に役立つ「ファシリテーション」を身につけよう！」

日程	2009年9月18日（金）10:00～16:00
会場	名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリー ベンチャーホール
参加人数	35名（一般学生30名、留学生5名）
言語	主に日本語（英語サポートあり）
講師	椿景子（NPO 法人国際ファシリテーション協会）
プログラム内容	「国際交流のためのファシリテーション」 ①オリエンテーション ②簡単にできるアイスブレイク ③国際交流はなぜやるの？ ④国際交流におけるファシリテーション ⑤異文化コミュニケーション ⑥交流会の企画ワンポイント ⑦実際に国際交流活動を企画してみよう ⑧振り返り



**第2回 グローバル・リーダー育成プログラム**

「もっともっと国際交流：名古屋・名城・南山大学でできること！」

日程	2010年2月15日（月）10:00～17:00
会場	名古屋大学法政国際教育協力研究センター CALE フォーラム
参加者	35名（一般学生30名・留学生5名）〈名古屋大22名，名城大9名，南山大4名〉
言語	主に日本語
講師	堀江未来（立命館大学）・高木ひとみ（名古屋大学）
主催	名古屋大学留学生相談室・留学生センター
協力	名城大学国際交流センター・南山大学国際教育センター
プログラム内容	①オリエンテーション ②アイスブレイキングゲーム（名城，南山，名古屋大学） ③各大学の国際交流活動紹介 ④講義「世界の留学交流と日本」（堀江未来） ⑤国際交流活動企画づくり ⑥留学生センター長顕彰表彰式 ⑦振り返り（アンケート），写真撮影

発展させ、「グローバル・リーダー育成プログラム」を2回実施することが可能となった。本年度は特に「学生の国際交流場面におけるファシリテーション能力の向上」，「世界の留学交流の動向を知り，より質の高い国際交流プログラムの企画・運営方法などを身につける」ことを目的とした研修を開催した。参加者は計70名であった。第2回目には，名城大学，南山大学と連携し，国際交流に関心のある学生間の交流や情報交換の場を創出した。

**【グローバル・リーダー育成プログラムの目的】**

- ・国際交流活動や留学生支援に関心のある学生の多文化理解能力，異文化間コミュニケーション能力，国際交流プログラム企画能力，ファシリテーション能力（進行・運営のための基本スキル）を高める
- ・学内において，学生が主体的に国際交流活動を企画し，互いに支え合い，学び合えるような仕組みを作っていくことのできる力を養う
- ・名古屋大学，南山大学，名城大学において国際交流活動に関わる学生が相互に情報交換できる場を作り，国際交流学生グループのネットワークを構築する

**【今後に向けて】**

2007年度から国際交流に関心のある学生たちを対象に研修を開発し実施してきたが，年々，学生たちの国際交流活動に対する意識が高まり，交流活動の企画内容などがレベルアップしているところに成果が見られている。研修中，「自分もリーダーになりたいという気

持ちでプログラムに参加した」という留学生の声を全体で聞く機会があり，一般学生の心にとっても響いたようである。現在は国際交流に関心のある学生を対象とした研修のため，参加者は交流活動に関わる学生が多い傾向にある。今後は，より多くの学生にとって魅力ある研修内容や形態を取り入れ，プログラムを発展させていけたらと検討している。さらに，近郊大学と連携しながら，学生同士がネットワークを広げ，ともに成長していくことのできる機会を増やしていきたい。

**5. Nagoya University Global Network 活動**

名古屋大学では，国際交流や異文化理解を促進することに関わる学生グループが多く存在し，キャンパスの国際化を支えている。留学生相談室や留学生センターと連携しながら活動を進めている「スモールワールド・コーヒーアワー」，「ヘルプデスク」，「ランゲージシャワー」，「留学のとびら」，そしてサークル活動として長年の歴史を持つ「異文化交流サークル ACE」や「名古屋大学留学生会 NUFSA」などである。これらの活動に関わる学生の力によって，留学生の学生生活を支えられる場面が増え，留学生と一般学生が出逢い，言語学習や海外留学の機会に触れることができる大学環境が生まれている。学生が共に支えあい，学び合う機会が創出されているといえる。

その一方で，これらの学生グループはキャンパスにおいて点在し，近い存在でありながら，有機的に関わり合う機会が少ないという現状があった。これらのグループが共に発展していくために，互いのグループの

ことを知り、ネットワークを築くことが必要であると考えられ、今年度から、学生グループの代表者と毎月1回、ランチ・ミーティングを開催することとなった。ミーティングでは、互いのグループ活動や課題、このネットワークの潜在的な可能性、国際交流に関わる学生たちが必要としている研修のニーズなど、昼休みという短い時間ではあるが、学生たちは近い志を持つ者として、活発に意見交換をしてきた。この国際交流に関わる学生グループのネットワークを学生たちは「Nagoya University Global Network」と命名した。

本年度のプロジェクトとしては、「名古屋大学国際交流グループ2009年度活動報告書」を共同発行した。各グループの紹介、メンバー募集、活動記録、グローバル・リーダー育成プログラム開催記録などを掲載した冊子が誕生した。各グループの学生メンバー、国際交流や留学等に関心のある学生たち、学内外の教職員に配布する予定である。今後も各グループの相互成長のために、活動報告書を発行していけたらと考えている。来年度のプロジェクトとしては、留学生と一般学生が活発に討議し、多文化理解を深めることのできる学生セミナーを開催したいと話している。詳しくは「名古屋大学国際交流グループ2009年度活動報告書」を参照されたい。

## 6. 博士論文サポートグループ

家庭と学業との両立に悩み、孤独感を感じながら研究を進めている博士課程の留学生や、入学後、研究室に入ったが、博士論文に向けての研究中心の生活で、他の学生とのネットワークを築くことができず、不安を抱える留学生の相談などが相次ぎ、博士課程の留学生を対象とした支援の仕組みを構築していくことが必要だと考えられた。そのため、試験的に女性に焦点を当てた、女性のための博士論文サポートグループを開催し始めた。月に1回、1時間という短い時間ではあるが、理系、文系、社会科学系の博士課程に在籍する留学生が集まり、自己紹介、家庭や生活などの近況報告、研究の進捗状況などを共有し、次月の博士論文の計画を立てる時間を設け、発表しあうという形式を取っている。使用言語は、その場に集まった留学生たちが得意な言語（英語・日本語）を用いた。必要に応じて、両言語を使用することもあった。

参加学生によると、「日々、子育てに追われているため自分自身が学生であることや博士論文という目標を

再認識できる場となっている」、「同じような環境にあるグループメンバーから、研究を進めるためのヒントや元気をもらうことができる」、「他の分野の博士課程の学生や同じ国の出身者などと出会える環境があることが嬉しい」などとの感想を述べている。

試験的な試みではあるが、継続して参加する学生が多く、学生のニーズを満たすサポートグループとして機能してきているといえる。今後もより多くの博士課程の学生のニーズに合う形へと発展させていき、充実したプログラムとして開発していきたいと考えている。

## 7. オリエンテーション活動

本年度も昨年度に続き、新入留学生を対象としたオリエンテーション(4月9日、10月20日)において、異文化適応についてのプレゼンテーション(日・英)を実施した。カルチャーショックが起こる要因、症状、対処方法などについて説明を行った。カルチャーショックという経験は、留学中には、誰にでも起こる自然な症状で、自分自身をケアする方法を工夫したり、人のサポートを得ながら克服していけることを強調した。

## 8. 授業

本年度は、基礎セミナー、教養科目、NUPACE 授業(開放科目)を担当し、学生たちの多文化理解能力、コミュニケーション能力を高めると同時に、留学生の異文化適応の促進を目指した授業を開講した。

2009年度前期：

・基礎セミナー「多文化社会を生きる」

(代表：松浦まち子)

2009年度後期：

・教養科目「留学生と日本」(代表：浮葉正親)

・NUPACE・開放科目(英語)「多文化理解をコミュニケーション」(高木ひとみ)

## Ⅲ. セミナー・地域連携

### 【セミナー・地域連携】

1. 「ミネソタ大学における留学生支援と日本の大学への応用」共同発表(平井・高木・高松)第30回異文化間教育学会(東京学芸大学, 2009年5月)
2. 国立大学法人留学生センター留学生指導担当研究

協議会「留学生指導の専門性：アメリカにおける留学生指導の専門性」パネリスト（東京大学，2009年6月）

3. 「ホストファミリー講座」講師（愛知県愛知郡長久手町，2009年7月）
4. 「英語で教える秘訣」講師，名古屋大学高等教育研究センター『大学教員をめざす君へ』（2009年8月）
5. 「ボランティア研修会：ホームステイ講座」講師（愛知県国際交流協会，2009年2月）
6. 「多文化間相互理解ワークショップ」ファシリテーター（関西大学，2009年3月）

#### 【留学生相談室スタディーグループ〈SD・FD活動〉】

2008年度から始めた留学生支援や国際教育交流分野に関する勉強会「留学生相談室スタディーグループ」を本年度も6回開催した。参加者は名古屋大学教職員，大学院生，近郊大学職員などである。文献を読みながら，普段の業務を振り返り，ディスカッションする機会は多くの教職員にとって，有意義な時間となっているようである。来年度も引き続き開催し，近郊地域における教職員がネットワークを広げ，グループ学習を続けていけるような環境を創出していきたい。

#### おわりに

2009年度の活動を振り返ると、「グループ・アプローチ」を活用した教育場面やプログラム実践の多い1年であったと言える。多様なグループの形態を用いて，学生たちが多文化交流できる場を増やし，学生が学生を支えあうことができ，また横の繋がりを感じながら学び合える機会を創出してきた。これらの取り組みについては，来年度以降，さらに学生や参加者のニーズをもとに，質を高めていく必要がある。留学生30万人計画やグローバル30(国際化拠点整備事業)が進み，留学生数が増えていくことが見込まれており，大学内に多くの留学生を効果的に支える仕組みをデザインし，学内の他部局や地域と連携しながら，創出していく必要性があると考えている。

（一部，「名古屋大学学生相談総合センター紀要，第9号，2009」，「名古屋大学国際交流グループ2009年度活動報告書」高木執筆分から引用）

#### 2009年度 留学生相談室スタディーグループ

第17回	4月21日	「留学生担当者のためのカウンセリング入門」(JAFSA ブックレット，アルク，井上孝代著) 第4章「カウンセリングの実際」輪読会
第18回	6月16日	「ケースで学ぶ異文化コミュニケーション：誤解・失敗・すれ違い」久米昭元・長谷川典子著，有斐閣選書「第1章：日本在住外国人」輪読会
第19回	11月17日	「ケースで学ぶ異文化コミュニケーション：誤解・失敗・すれ違い」(久米昭元・長谷川典子著，有斐閣選書)「第4章：海外留学」輪読会
第20回	12月1日	「ケースで学ぶ異文化コミュニケーション：誤解・失敗・すれ違い」(久米昭元・長谷川典子著，有斐閣選書)「第9章：マスメディアとパーセプション・ギャップ」輪読会
第21回	1月19日	「学生の成長を促す人の自己成長：自らのビジョンを省みる」(JAFSA JFK (国際交流担当者研修)より)
第22回	3月2日	「アジア人との正しい付き合い方：異文化へのまなざし」(小竹裕一著，NHK出版)「第3章〈友達〉と〈チング〉はどうちがうのかアジア人とのコミュニケーションの難しさ」輪読会



## 【付録】

## 国際交流学生グループの支援をめぐって ～学生と共に、学び、歩んだ4年間を振り返って～

高木ひとみ

## I. はじめに

留学生相談室が2005年後期からスタートした「スモールワールド・コーヒーアワー」（以下、コーヒーアワーとする）も今年度で4年目を迎える。留学生・一般学生・教職員などが、リラックスした雰囲気の中で、お茶などを飲みながら、対話できる場を作ろうという思いで開始した。

当初は、月に1～2回、筆者の研究室を会場に、お茶やお菓子などを準備して、10人ほどの参加者のもとで、日本語や英語などを用いながら、小グループでのディスカッションなどを楽しんでいた。次第に参加者は増え続け国際交流に関心の高い学生たちが、コーヒーアワーの準備や片付けなどを手伝うようになり、学生と共に運営するようになった。現在では、約10名～15名の学生スタッフがチームとして、主体的に企画運営を進めている。国際交流に関心のある学生、海外に行ってみたい学生、海外留学から帰国した学生、国際的に活躍したい学生、日本での留学中に何か活動に関わりたい外国人留学生、学業や生活に慣れ、人の支えになる活動をしてみたい外国人留学生などが学生スタッフとして登録している。

コーヒーアワーは、毎月1回（最終週の木・金曜日など、16時半～18時）、留学生センターのラウンジで開催しており、参加者は約50人～100人である。毎回、テーマを決め、学生たちが交流しやすいような仕組みを作り、国際交流の場を提供している。コーヒーアワー運営に関わる経費については、留学生相談室の予算と、学生たちが毎年学園祭にて行っているフリーマーケットによって得られている売上金を当てている。

留学生相談室が教育プログラムとして始めたコーヒーアワーであるため、学内の国際交流を目的としたサークル活動と比較すると、性質的に異なる点が存在する。留学生相談室主催のプログラムであることから、学生たちは教職員と相談・連携しながら国際交流活動を運営している。

また学生スタッフが、いつでも参加できることも特

徴の1つと言える。現在の学生スタッフは学部生の高学年（3、4年生）や大学院生（修士・博士）などの比率が高い。学生スタッフに聞くと、学部1・2年生のときは、サークル活動等に参加していなかったが、何か活動したいと思うようになり参加し始めたという。コーヒーアワーの学生スタッフチームへの参加はオープンな形式を取っているため、多様なバックグラウンドを持つ学生たちが登録している。しかしオープンな反面、メンバーが流動的な面もあり、組織化をいかに進めるかが課題となっている。

開始から4年間、学生の主体性をはじめ、国際交流に対する意識やボランティア意識を大事に育てつつ、大学のプログラムとしてグループの運営とサポートをどのように進めたら良いかということについては試行錯誤の連続であった。本稿では、まだ発展途中ではあるが、筆者がコーヒーアワーの学生スタッフチームにどのような教育的支援を行ってきたかをまとめ、今度の活動の発展に繋げていきたいと思う。コーヒーアワーに関する本年度の報告については、本紀要「名古屋大学留学生相談室（740号室）活動報告」、122～123ページを参照されたい。



コーヒーアワー：縁日

## II. 国際交流学生グループへの教育的支援

## (1) 学生スタッフへの声かけを大切にす

コーヒーアワーは、留学生相談室主催の教育プロ

グラムという位置づけであるため、この活動を支える学生ボランティアたちは、留学生相談室の「パートナー」だと言える。学生が自由に活動しているわけではなく、留学生相談室が学内に提供したい教育活動の基に、学生たちが参加するという位置づけである。そのため、コーヒアワー作りに関わる学生一人一人を大切にするという意識を教職員側が持つことが大切である。学生スタッフたちが、教職員に対して、信頼感や安心感を持って接することができるよう、学生からの相談は丁寧に対応したり、ほめる機会を大切にしたりしてきた。あまり参加できていない学生スタッフが久しぶりに顔を出すことがあったら、必ず声をかけ、次回も参加しやすいような教育環境を創出するようつとめてきた。

## (2) 毎回の活動の振り返りの重要性を伝える

学生が主体的に運営しているプログラムであるため、コーヒアワーの準備、イベント本番、後片付けなどの部分で、様々なことが起こる。現在は多い時間で約100人の参加者が集まることがあり、全体の流れや役割分担等、しっかりと計画する必要性が出てくる。学生たちが計画した通りにイベントが進む場合がほとんどであるが、時には、司会者の声が届かない状況が生まれ、企画したゲームが成り立ちにくくなったり、紙コップが必要以上に消費されたり、ゴミの分別がされていなかったりなどの状況が生まれたこともあった。現場で教職員がサポートすることもあるが、学生たちの活動を見守りつつ、振り返りの時間を大切にしてきた。毎回、コーヒアワーの後には、必ず短い時間であっても「振り返る」時間を作り、うまくいったこと、いかなかったこと、改善点、次へのアイデアなどを、全体で共有し、次の活動に向けて、学びが生まれる重要性を伝えている。国際交流イベント運営というひとつの「体験」を通して、そこから「学び」につながるプロセスを大切にしていくことが学生の教育面においても重要だと考えている。

## (3) 企画書・報告書作成の重要性を伝える

学生たちはほぼ週1回、昼休みなどに集まり、コーヒアワーの実施に向けて話し合いを進めている。話し合われた内容は、主にメーリングリストを活用して、議事録が流れるようにしている（情報の

共有化）。しかしながら、毎週の議事録では、まとまっていない部分もあり、イベント計画の全体像を把握しにくい場合がある。学生たちには、話し合いがまとまった段階で、イベントの企画書（テーマ、内容、当日の流れ、会場の配置、役割分担、準備するもの、広報活動等）を作成するよう提案している。準備時間などによって、企画書を作成できないときもあるが、作成できたときのコーヒアワーでは、学生ボランティアの動きも良い。振り返りの報告も、記録を取り、残すよう提案している。これらの企画書や報告書、またその他の資料は、学内のインターネット上のコミュニティー（SNS：ソーシャル・ネットワーク・サービス）「MINT」上に、コーヒアワーのコミュニティーグループを作り、コーヒアワーメンバー内で閲覧できるようになっている。

## (4) 企画・運営力の向上につながるヒントを提供する

コーヒアワーでは、毎回、テーマを企画している。テーマ決めの際にアイデアが煮詰まった際には、学生たちの進捗状況を聞きながら、必要に応じて、新しいテーマの視点、アイスブレイキングの方法、文化的な要素、他大学のコーヒアワーの形式を提案したり、紹介するなど、情報やアイデアを提供している。例えば、ジェスチャーに関するゲームをしたいという時に、少し教育的な要素が入ると良いのではないかと思い、言語・非言語コミュニケーションの違いについて紹介し、世界のジェスチャーに関する文献などを渡したところ、学生たちが留学生たちと「世界のジェスチャー」というクイズシートを、自分たちでポーズをとりながら写真を撮って、作成してきたことがある。学生たちは楽しみながら、非言語コミュニケーションの違いについて学ぶことができたようである。学生たちのミーティングに毎回参加する必要はないが、学生の間だけでは、煮詰まって来たときや、うまく進んでいないときなどに、相談に乗れるよう、教職員はほどよい距離を持っておくと、活動自体がマンネリ化することもなく、継続的に発展する活動へと変わっていくのではないかと思う。



準備ミーティング

#### (5) 学内外におけるリソース(会場、活動場所、備品、資金)の情報提供とサポート

学生が学内において国際交流活動を行う場合、会場の確保や備品を借りる上でのサポート、資金や助成金に関する情報提供を行う必要が出てくる。コーヒーアワーでは、留学生センターのラウンジを使用しており、会場だけではなく、留学生センターの給湯室、冷蔵庫、ポット、掃除用具など借りる必要がある。必要なものに関しては、まずは学生に考えるよう伝えているが、教職員がサポートして、借りられるような支援をすると、毎回のイベントがより効率的に進む場合がある。高松(2006)によると、教職員や顧問となる担当者が「学生と大学をつなぐ役割」を担うことで、グループの活動が継続していきやすいという。

さらに、学生がより主体的な活動が行えるよう、資金面のサポートも重要である。コーヒーアワーでは留学生相談室で確保している予算に加えて、より自由に活動が広げられるよう、毎年フリーマーケットを開催し、資金を得ている。コーヒーアワー開催のために参加者から会費を取ろうという意見も出たことがあるが、学生スタッフたちは、できる限り参加費無料のイベントを開催していきたいという意見にまとめ、自分たちで資金を作る仕組みを作った。

学生の教育的活動に対する助成金に関する情報提供していくことも重要である。コーヒーアワーでは、名古屋大学全学同窓会による支援を受け、発展してきた経緯がある。

#### (6) 学生スタッフチームや組織づくりのヒントを提供する

学生スタッフチームが、持続可能な学生グループとして成り立つようチーム作りや組織作りの部分では、教育的な支援が必要だと考えられる。強いリーダーシップやアクティブなメンバーがいる時期は、教職員のサポートが少ない状態でも、チームが発展していく可能性が高い。しかしながら、活動が停滞する時期もあり必要に応じて教育的な助言を行ってきた。

コーヒーアワーの学生スタッフチームには、チームづくりのために新スタッフを継続的に募集していく大切さ、新スタッフが入った際のサポートの大切さ、チーム内での定期的なレクリエーション(新スタッフ歓迎会、新年会、海外留学いってらっしゃい会、卒業生を送る会)を開催する重要性を伝えてきた。チームづくりに関するイベントの幹事やサポートなどを通して、学生たちは、このような機会をプロデュースする大切さを学んでいたようである。

コーヒーアワーの学生スタッフチームの組織については、学生スタッフの流動性(留学、就職活動等によるところが多い)が高いため、その強みと弱みを持つ組織となっているが、必要に応じて、組織の体制や運営方法について検討する機会を持つよう伝えている。定期的に組織運営について話し合う機会の作り方をアドバイスしている。



組織運営に関するブレインストーミング

#### (7) 他グループや他大学との関わりや交流の機会を作る

コーヒーアワーのさらなる発展のために、近郊大学で行われているコーヒーアワー活動や国際交流活動について学生が学ぶことのできる機会を提



供してきた。例えば、南山大学コーヒーアワーを見学したり、愛媛大学にて開催されたシンポジウムに参加し、愛媛大学において活動している「インターナショナル・チャットルーム」の学生メンバーや神戸大学において長年の歴史を持つ国際交流サークル「Truss」メンバーとの交流などを持ってきた。見学や交流の機会に参加した学生たちは、新しいアイデアを得ることができ、国際交流活動の意義や目的などについて再確認する機会を得ることができたようである。

2007年度から、留学生相談室では、国際交流に関心のある学生を対象に国際交流活動の企画運営などに関する研修を提供しているが、この研修において、他の国際交流グループや他大学との学生と互いに学び合える場が生まれ、日々の国際交流活動においても幅が生まれている（グローバルリーダー育成プログラム）。

2009年度からは、学内の国際交流グループのネットワーク（Nagoya University Global Network）を立ち上げ、共同で活動報告書を発行した（詳しくは、本紀要「名古屋大学留学生相談室（740号室）活動報告」124ページを参照）。活動報告書を発行するという共通の目標を、学内の国際交流グループが持つことにより、互いのグループ間でのコミュニケーションが生まれ、互いの活動から学び合える相互学習の場が生まれた。この連携の場において、日本人学生の多い学生グループは、留学生の国際交流グループの声やニーズを聞くことができ、学生たちは連携することの意味を感じ取っているようである。

#### (8) 研修の機会を提供する

国際交流活動に関わる、または関心のある学生を対象に継続的な研修を提供することは、学生グループの発展やより質の高い国際交流活動を学生たちが作り上げていくことにつながっている。これまで留学生相談室と留学生センターでは、研修を5回開催し、現在では、グローバル・リーダー育成プログラムという名称で開催している。研修では、「国際交流の意義について考える」、「異文化間コミュニケーション能力を高める」、「大学の構成員の国際交流に対するニーズを考える」、「国際交流イベントや仕組みを実際に企画してみる」、「国際交流活動に役立つファシリテーション方法を学ぶ」などをテーマに扱って

きた。参加型の研修スタイルを用いて、学生が国際交流活動の現場において役立つスキルの向上、国際交流に関わる意味や意義について考えられる機会の提供などを行い、学生たちの意識も向上している。



グローバルリーダー育成プログラム

#### (9) 学生に程よいチャレンジや羽ばたける機会を提供する

学生スタッフの様子を見ながら、適切な時期に、新しい役割にチャレンジしたり、積極的に取り組めるよう、助言している。例えば、コーヒーアワーの学生スタッフになって、間もない時期は、コーヒー作りや会場作りや受付などを担当することが多いが、数ヶ月経ち、慣れて来た様子が見られたら、ミーティングで議事録を取ったり、イベント当日に司会や進行などを担当することを勧めている。また、海外に行くことや留学を希望している学生などには、英語での司会にチャレンジしたり、日本での学生生活に慣れて来た留学生には、日本語で司会することを勧めている。学生たちは不安感を抱きながらも、サポートを受けながらチャレンジすることによって、経験を深めている。学生が、はじめて司会をする前には、原稿を用意し、他のメンバーに確認してもらい、練習した上で、本番を迎えている。程よいチャレンジを経験した後の学生たちからは、自分自身への信頼感が高まっている様子が伺える。学生がこれらの経験を積み重ねることによって、日常レベルでも、自分自身の能力を高めたり、さらに国際的な機会へと羽ばたいていけるような力をつけていくことを願っている。



学生スタッフ集合写真

### Ⅲ. おわりに

本稿をまとめるにあたり、4年間の取り組みを整理するとともに、学生スタッフへのインタビューも併せて行った。

インタビューにおいて学生スタッフとしての活動について経験を聞いたところ、始めは国際交流に関わりたくて、スタッフとして参加し始めたが、イベントを計画して、実行し、振り返るという一連の過程を経験し、ひとつの企画を進ませる上でのスキルや配慮など学ぶことができるようになったという声が多く聞かれた。議事録の取り方、インターネット上のメーリングリストやコミュニティーの活用方法、会場の配置による人の流れの作り方、受付での参加者へのコミュニケーションの取り方、司会やゲームのファシリテーションの仕方、国際交流活動を行う上での文化的な配慮など、多くのことを学び、身につけているようである。また、自分たちが楽しく国際交流に関わるだけでなく、コーヒアワーの参加者が楽しそうに交流していたり、参加者が増えていくという成果を感じ

ると、さらに嬉しい気持ちになり、それがコーヒアワーの活動を続けていく原動力ともなっているとのことである。

さらに、コーヒアワー活動に関わり、留学経験者や留学生と触れ合うことができ、海外に行くことが身近に感じられ、海外での研修プログラムや交換留学に参加することをめざし、新しいステップを踏む学生たちも見られる。

活動の全体を通して、学生たちは、国際交流活動の企画運営能力、コミュニケーション能力、チーム・組織編成能力、自分自身に対する信頼感や自尊心などを高める機会を得ている。

国際交流学生グループの教育的支援を行うことは、キャンパスの国際交流が活発になるだけでなく、学生が学生を支援する場面を生み、多くの学生の成長を促すことにつながる可能性を秘めている。キャンパスにおいて、学生が主体的に活動できる環境を効果的に創出していく方法や学生グループ活動をする上での教育的支援の方法の開発には、今後さらなる実践と研究が必要だと考えられるが、大学内での様々な場面をとらえて、教職員が学生に教育的に関わる機会を増やしていくことが重要である。

国際交流グループでの活動が、学生にとってどのような「学び」の機会となりえるのか、質的および組織論的な研究としてまとめ上げることを筆者の次なる課題としたい。

#### (参考・引用文献)

高松里(2006)「国際交流学生サークル活動への教育的サポート：九州大学国際親善会」の活動と会への支援」九州大学留学生センター紀要、第15号、pp.67-74